

## 書評

Theodore H. Runyon  
*The New Creation*  
*John Wesley's Theology Today*  
(Nashville: Abingdon, 1998)

藤本 満

ランヨンは、米国エモリー大学、キャンドラー・スクール・オブ・セオロジーで組織神学の40年にわたり教鞭を執った。本号で野村氏が評している書は、ランヨンの退官記念に際して寄せられた論文集である。1952年に、彼はドリュー大学神学修士(B.D.)の課程に入学する。当時、多くのメソジスト神学校でウェスレーが講じられることのなかった時代、ドリュー大学にフランツ・ヒルデブラントが就任する。ヒルデブラントはルター派神学者で、大戦中にドイツから英国に亡命し、その後、ウェスレーの賛美歌研究や聖餐論に多大な貢献をメソジストに残した。ランヨンは、ヒルデブラントのもとで学ぶよりも、むしろ日本でも名の知られているカール・マイケルソンのもとで「世俗の神学」に関心を持ち、卒業後はゲッチングゲン大学に進み、1958年でゴーガルテンとティリッヒの研究で博士号を取得し、その後エモリー大学に戻ることになる。

実に多くのメソジスト系研究者がドイツに留学し、メソジストの神学的な自己同一性を追求するというよりは、実存主義神学や世俗の神学を学ぶことが多かった時代であった。そのような中で、ランヨンは、米国のメソジストサークルにおいて、モルトマンの影響下の中で、当時台頭してきた解放の神学を押し進めてきた一人である。

1977年、英国と米国のウェスレー・メソジスト研究者を集めて開催される、第6回 Oxford Institute of Methodist Theological Studies において、彼は米国側の責任を担った。その時の全体テーマが、「ウェスレーと解放の神学」であり、後に、ランヨンの編集により、*Sanctification and Liberation*(1981) が出版されることになる。その中で、例えば、彼は静止主義で神秘主義的であったモラビア派に、プラクシスを重んじたウェスレーが反発しているのは、プラクシスを重んじたマルクスが、思弁的であったフォイエルバッハを乗り越えようとしているのと類似している、などという、モルトマンがマルクスとの対話で学んだ洞察を積極的にウェスレー神学の中に読み込んでいるのが興味深い。

ウェスレー研究において多くの執筆をしているのではないが、ランヨンが一貫してウェスレーに寄せてきた関心は、社会問題と体験の神学である。たとえば、後者に関して言えば、ランヨンは、1988年には *Drew Gateway* に”A New Look at Experience”を、1989年には *Papers of the Canadian Methodist Historical Society* に”Wesley and ‘Right Experience’”を、1990年には *Aldersgate Reconsidered* (Kingswood) に”The Importance of Experience for Faith”を出版している。そのように、本書においても、ウェスレーの社会的関心を今日のわれわれの神学課題にどう適用するか(6章: Wesley for Today)、そしてウェスレー神学における体験の神学的評価(5章: Orthodoxy and Religious Experience)には、相当のページ数を割いている。

さて、実際の書評に入る前に、もう一つ触れておくべきことがある。本書と、メソジストでありプロセス神学者の旗手であるジョン・カブによる *Grace and Responsibility*(1995)とは、似た面を持っている。ランヨンもカブも、そもそもの専門領域はウェスレー研究ではない。それでいながら、この二つの書は、現代の米国メソジスト教会が取り組んできた諸問題に対して、ウェスレーの視点に帰って、その神学的取り組みに一貫したバックボーンを与えようとしている。その意味で、メソジスト研究家が、その延長で現代の諸問題を論じるのではなく、今日の諸問題と格闘する神学者が、その根拠をウェスレーに求めているのである。

仮に二書を読み比べてみると、カブは「自分はプロセス神学者として、ウェスレーの神学を整理する」と明記しているだけに、カブ本来の神学指向がどうしても先行する傾向にある。にもかかわらず、彼の流ちょうな筆運びにより、何十年もウェスレー研究を重ねている者たちよりも説得力をもって正統的なウェスレー神学を解説していることも事実である。ランヨンの展開ははるかに緻密である。それは、実際ランディー・マドックスを含めて、多くのウェスレー論文をエモリー大学で指導してきた成果であろう。

また二者は、ウェスレーと現代的諸問題という最終的な目的を念頭に置きながら、ウェスレー神学の全体像をとりまとめようとしているわけだが、それぞれがとりまとめの軸に用いているテーマも興味深い。カブはタイトルにあるように「神の恵みに応答する人間の責任」を神学の軸とし、ランヨンは「新創造」という概念を用いる。両方とも、ウェスレー神学にとって特徴的なテーマであり、今日の教会と社会とを考えていく時、あらためてウェスレーに帰る意義が浮き彫りにされている。すなわちこの二つの本は、現代に足場を据えてウェスレーを研究するという、神学者の実存が明確に現れている書であり、それ故に刺激的な内容である。

評者は、ウェスレー研究は（ルターやカルヴァン研究同様）ある程度、やり尽くされたと理解してきた。しかし、こうした書物に出会うと、今日的課題に対して、もてはやされる新神学よりもはるかに強い原動力を古典神学が内に備えていること、そしてそれを引き出すことができる研究者の妙技に、あらためて感心する次第である。

\* \* \*

各章の進め方は、ウェスレーの救済論の組み立てに合わせてある。1章「神の像」において、まず本来的な人間性（神の恵みに創造され、被造物の上に立ち、神の御前に生きる）を当時の理神論などの人間観と比較し、神の像の刷新こそ、救いの全体像であると説明する。続く2章「新創造における恵み」で、先行的恵み、信仰義認、救いの確証を論じ、3章「変貌させる恵み」で、新生、霊的感覚の目覚め、聖化の恵み、罪の性質、愛の増大、全き聖化・キリスト者の完全と、人が神の像に再創造され、その像がより確かなものとして成長し、確立していく過程を追っていく。4章「クリスチャン・コミュニ

「ティーと恵みの手段」において、ラニヨンは、神の恵みを「継続して」(on a continuing basis, p.103)体験していくために、いかにメソジストの組会を中心とした小グループのシステム、そして聖餐が必要であるかを説いている。前者がいわゆるセクト的・個人的な要素だとすれば、後者は教会の制度的要素である。その両者が相まって、2章・3章で論じた恵みが継続して体験され、確立されていくことが良くわかる。

ウェスレーの救済論は、ここで一旦区切りをつけ、5章は、先に述べたように、体験の神学をラニヨン特有の観点から整理している。彼は、オーソパシーという言葉を用いる。神学が、正統神学(オーソドクシー)、正統倫理学(オーソプラクシス)を含むとすれば、それはまた人の心情(feelings, affections, experience)に関わる正統的な心の状態、オーソドックスなパトスをも範疇に入れるべきであるという主張である。これは特に、ウェスレーが人を常に心身の統合と観ていたことからすれば、正しい分析といわざるを得ない。現代の人間は、なかなか人を心身の統合体と見なすことができず、思考と心情がばらばらであり、信仰と行動とが相反するような状況にある。このように現代が分裂的に人間を理解し、社会が成り立ってしまうような世界を当然と理解している中であって、あらためて、神の像を刻まれた人間は心身の統合体であり、「経験」に正統な神学的理解を与えなければならない、というラニヨンの主張に、評者は深く共感するものである。

6章が、「今日的課題のためのウェスレー」で、ラニヨンは執筆の関心は、そもそもこの章にあった。小題目には、人権(良心の自由の問題、ウェスレーと奴隷解放)、貧困と貧者の権利(18世紀英国の社会事情の分析を含めて)、女性の権利、環境問題(神の像に刻まれた人間が被造物を管理するという視点やウェスレーの動物観を含む)、ウェスレーと超教派、ウェスレーと宗教的寛容・他宗教、とどれもそれほど多くのページ数は割かれていないが、注を含めて、その分野におけるウェスレー研究を詳細に整理しており、今後、この分野において研究をする者には、適切な導入と視点を与えてくれる内容になっている。

そして最終章を、ラニヨンは「聖化論再考」と題して、ウェスレー神学の中心課題に自身のメスを入れることで、本書を閉じている。ウェスレーの社

会との関わりを神学的に検討した後で、もはや彼の「キリスト者の完全」を動機の純粹という枠にはめ込んで、個人的な救いという内向きの完全に限定してはならないと指摘している。ウェスレーが「キリスト者の完全」の定義に「愛」を用い、全き愛という観点から論じていたことを強調しつつ、ラニヨンはそのように完全な愛は神の愛であって、キリスト者の完全とは、この神の愛に参与し、この愛を他者に向けて反映することであると述べている。「この教理の再考にあたって、重要なことは、われわれが自分自身の完全ではなく、われわれが受けたもの（御霊を通してキリストから受けた全き神の愛）に焦点を合わせることである。……完全とは自己の完全でも自分のための完全でもない。それは神から既に受けたもの、また今も受けつつあるものを他者に向けて具現し反映するために自らが召されているという召しの成就を意味する」（p.225）。

本書は、どの章を取り上げても、博士論文的な新しい分野の開拓、あるいは研究成果の発表ではない。しかし、注を含めて、ラニヨンが背景において参照したウェスレー研究は正統的であり、なおかつ最新のものが中心であり、ここ二〇年、エモリー大学で現代神学を中心とした組織神学を講じながら、堅実にウェスレーに関心を寄せ続けてきた軌跡を明確にうかがい知ることができる。なおかつ、膨大なウェスレー神学という世界を、それほどページ数をかけることなく、ウェスレー神学の中心問題である「新創造」というテーマを用いて、終末期の行き詰まった世界に向けて、そして新世紀への期待感を込めて、ウェスレーを現代と関連づけたという点で、神学者ラニヨンの秀才を感じさせる書である。

なおこういう時代であるから、インターネット価格を紹介しておくと、日本のアマゾン書店(<http://www.amazon.co.jp>)で、2470円（送料無料）で入手できる。

（インマヌエル高津教会牧師）